

らです。

昔は、山から山へ、ワイヤーを掛けて木材を降ろしました。しかし、今はチェーンソーでやっているのです。能率は上がったのですが、今は、建材が以前と違って、外材などの合板類に代わっています。そのため、日本の林業は振るわなくなっています。

昔は、細い木も大切に育てたから、採られたら大変でしたが、今は、一抱えもある木がそのままになっています。これは、今は外材、合板の時代になってしまったからです。

私は、戦後の林業の変遷を身をもって体験し、見て来ています。これが私の人生です。今の林業は大変です。山持ちが、山を持っていても、山の管理ができず、我々もそれができないのです。田畑は一年勝負ですが、林業は三十〜五十年です。今は林業は政府補助でやっています。政府から金を借りた林業家はつぶれて行く。金利も払えず、その金額も大変です。

私の軍隊生活、中国での戦争体験からみても、今の林業の姿に似ているような気がしないでもありません。

ん。しかし、私も何とか戦争末期を倒れることなく、死ぬことなく耐えて、現在に至っています。私の親から譲られ、残された林業の将来を思いつつある今日この頃であります。

満州・北支・本土防衛

三度の召集

岩手県 菊地 政男

大正六（一九一七）年三月二十一日、本籍地、岩手県江刺郡稲瀬村大字照沢字、菊池正二の長男として生まれ、現住所は、岩手県胆沢郡金ヶ崎町六原前二ツ森です。

昭和十三（一九三八）年九月九日、歩兵第三十一連隊留守隊に入隊、第六中隊編入、同年十一月二十六日、歩兵第三十一連隊補充要員として、弘前を出発、新潟港より出帆、十二月一日、朝鮮羅新上陸、十二月三日、満州（現中華民国東北地方）牡丹江省綏陽県観

月台着、同部隊第十一中隊に編入されました。

初めての満州、東北育ちの私にとっても、寒さは身に凍みる。以後、昭和十五年六月十日、観月台出発、同十一日、綏陽県綏西着、同十六年二月二十二日、内地帰還のため綏西出発、同月二十五日、羅津港出発、三月三日、大阪港上陸、三月五日、弘前着、三月十二日召集解除となりました。

その後、昭和十六年十二月八日、大戦勃発となり、我々召集解除者の多数者が召集され、再び各戦線に出発することになったのです。

続いて、この大戦以後の私の軍歴について列記してみます。

昭和十七年四月九日、第二回目の召集があり、歩兵第五十二連隊に応召、独立歩兵第百十八大隊第五中隊名倉隊に編入、同年五月十日、弘前出発、五月二十一日、北支山西省洪洞県着、昭和十八年七月十九日、歩兵第三十一連隊に転属のため、翼城出発、八月四日、弘前着、八月十日召集解除となりました。

さらに昭和二十年七月五日、西部軍官区部隊要員として、歩兵第一補充隊に応召、第一中隊に編入され、七月二十三日、鹿兒島着、八月十四日、天草郡久玉村着、九月十五日召集解除となり、通算十一年十一月、以上が私の軍歴の概要でありました。

思い出の軍隊は、体力の続く限り、今は想像もできない苦難の毎日でありました。北満州は、最も寒い時は零下五〇度、夏は華氏一〇〇度にもなり、蚊や蚋（ぶよ＝小さい吸血虫）の成群に悩まされました。

行軍の時は軍服が、すっかり汗ばみ、乾いた時は服の上は白くなった塩分をかき下ろして食べることでできる程でありました。

楽しかったことは、兵役が満期除隊となり、家に帰ることを夢見ること。こんな夢ばかりで、こんな時の嬉しさは世の中にはありませんでした。満期は、現役満期除隊・召集解除と計三回ありました。

回想記

弘前歩兵第三十一連隊に入隊、不寝番勤務の時、月夜の営庭から、聳える岩木山を見ると、いつも自然に涙が出て、悲しきでいっぱいでした。岩木山や山田野、館野の演習、そして、リンゴ園等、数々の思い出を後に、昭和十三年十一月二十九日、新潟港より、三千トン級の貨物船にて羅津港上陸、そして、満ソ国境の観月台B築の歩兵第三十一連隊第十一中隊に着きました。

毎日の銃剣術で腕が腫れ、服の袖を通すのに苦労しました。また、仕事は下の川より氷を担いできて、釜に入れ溶かすための薪切りの毎日でありました。しかし、洞窟兵舎のため、中は暖かでした。

昭和十四年二月二十六日、第九中隊、千田喜兵衛中尉の指揮する第十・第十一中隊より抽出され一個分隊の移動偵察班に参加を命ぜられました。そして暁天台日号界標付近にて肉眼では豆粒位にししか見えませんでした。千田隊長が双眼鏡で見れば満領だと言い、これを挟み討ちすることになり、二隊に分かれて攻撃を

しました。近付いて見るとソ連兵二人が血だらけで倒れており、他の三人は深い森林の中へ消えて行きました。

隊長は、逆襲が来ては大変（こちらは少数の偵察隊）と、側の約五メートルの窪地に死体を落し「全員至急引き返せ」と命令をしました。私は最後尾へ残り、隊長に隠れて、窪地に駆け下り、死体のポケット等をさぐり、財布・手帳を見付け、また、帽子も靴も取ろうとしたら、死体が動いたので、驚いて窪地を駆け登り、約二〇〇メートル位先に進んだ隊長に「生きていますよ！」と叫ぶ。

全員は引き返し、隊長が、水筒の水を死体の頭から掛けると、一人は完全に生き返り、血だらけの頭でしたが擦傷で気絶していたのでした。一人は完全に死んでおり、生き返ったソ連兵を、私と佐々木勘藏一等兵と二人で肩をかけ、死んだ方は、切金哲男外三人で運んで帰りました。

捕虜の兵の年令は十七歳とのことでしたので、平成十三（二〇〇一）年度になった現在では、七十歳に

なっていると思います。六尺（一メートル八十センチ余）以上の大きな体でした。私は可哀想と思いい、煙草を与えると数回に分けて大事に吸います。握り飯も数回に分けて大切そうに食べていたのが印象に残っております。服のボタンは皆木の切れを糸で結んだ粗末なものでした。

後日、その兵隊は捕虜交換に使用したと聞いており、頭の傷の個所から見てもゴルバチョフ氏に似ているような気がしてなりません。零下一五度の寒さでしたから、あの窪地に放っておいたら凍死していたと思いますので、捕虜として連れて帰ったから生きていたのだでしょう。

平成十年、私は、ウラジオストクに行ったので、もし丈夫でおったらと思いい、通訳に捜して欲しいと願いましたが連絡はありませんでした。

これが後日、小泉第十二中隊長の戦死した、暁天台事件になったのではないかと思っております。

「昭和十四年二月二十六日、歩兵第三十一連隊第九中隊千田喜兵衛中尉の指揮する一個分隊移動偵察班

は、暁天台西方H号界西方で、越境ソ連兵と遭遇、この敵兵を捕虜とした功により、師団長塚田攻中将より賞詞を授与さる」とありますが、部下は知りませんでした。隊長の手柄のようでした。

それから二週間後は、H号界付近で第十二中隊が交戦、小泉中隊長が戦死。更に一週間後に、暁天台守備隊の満州国国境警察隊が、ソ連軍の襲撃を受け、日本人の千葉警察隊長が負傷する。また、その後、観月台物見台の監視哨正面にて、同哨勤務の牛崎軍曹が敵弾を受け戦死、河野上等兵が負傷したと聞いておりますので、私達のソ連兵捕虜の仕返し、逆襲ではなかったのか、と思っております。

また、同年十一月頃でしたか、私は千早の監視哨に、第十一中隊の高屋敷・菊池・三浦・そして私と四人で、昼夜連続で、ソ連軍の動静を監視しておりましたが、第十一中隊の初年兵教育の演習で、菊池秀夫上等兵の擲弾筒の空砲で野火となり、西風にあおられ、東へ東へと燃えて行き、観月台正面のソ連陣地の大部分が焼け、ソ連の火薬庫が爆発する等の事件が、特に

印象に残っております。

その数日後、ソ連の騎兵二人が、A築・B築陣地と陣地の中間に潜入し、我がB築より、A築の連絡兵鈴木藤一外二人と、バッタリ会い、驚いて逃げるソ連騎兵の速さには驚きました。連絡により、心配して駆け上がった来た水上石造准尉に状況を報告した際「飛行機より早くて分かりませんでした」と報告したら「馬鹿野郎！」と怒鳴られたことが忘れることができませんでした。

その場所が、昭和二十年八月のソ連参戦の際、ソ連の大軍が侵入して来た所であると、言っております。私は平成十年に行ってみましたが、今はもう道も無く、大森林となっており、狼の吠える黒金山等、四方の山々は、ただただ懐かしさでいっぱいでした。

昭和十五年初め、歩兵第三十一年連隊の年一回の銃剣術の試合が緩西でありました。今までは師団第一として、我が第十一中隊には優勝記念品として、銃剣術の防具が名誉として飾られておりました。しかし、そ

の時の試合には第九中隊に負けてしまいました。

観月台のB築の中隊では、留守の人達が凱旋門を造り、赤飯を炊いて勝ってくるものと思って迎えられたのですが、負けて帰ったので叱られ、凱旋門は壊された、赤飯は食わせられず、すぐ防具を着け、零下三〇度の野外で銃剣術の練習をさせられたことも忘れられないことの一つでありました。

ノモンハン事件の時は、完全軍装で三週間位待機しておりましたが、事件が終わったので、出勤できなかった。

昭和十六年二月の、関東軍大演習（関特演）は死ぬより辛かった。当時、第十一中隊長は岩手県金ヶ崎出身の後藤清之進大尉で、歯切れの良い号令がまだに忘れることができます。同年三月、内地へ帰還、そして除隊となりました。

翌年十七年五月、再度召集、北支那山西省の勝部隊（第六十九師団）に行きましたが、千田喜兵衛中尉が、大尉として一緒でした。

北支那 山西省の記

昭和十七年五月、弘前出發、山西省洪洞着、これより任地に着き、各中隊全員の集合がありました。特別に手榴弾一人一個が渡され、伊藤晃大隊長の訓辞では敵中の行軍なので、もし敵に捕まったら「手榴弾で自決せよ」との命令でした。これは大変なことと思っておりましたら、酒保経験者がいないかとのことで、私一人手を上げ、酒保要員として残され「十七春大行作戦」をまぬかれました。しかしこの時も、戦友がたくさん戦死と聞いており、我が第五中隊では、阿部孝上等兵以下数人と聞いております。

昭和十七年秋、県鎮に一個小隊の守備の要員として行き、衛兵司令として、毎日の守備につきましましたが、夜になると、毎日二百人位の敵に囲まれ手榴弾を投げ込まれました。

約四キロ離れた隣の分哨長、九州長崎出身の増山軍曹を長として一個分隊では、敵の夜襲を受け、多数の負傷者を出しており、どうすることもできないということでした。

私は各所に歩哨を配置し、夕方未だ薄明るいうちは、伏せているよう命じました（姿勢が高いと敵に狙撃もされる）。これは、我が歩哨線が敵に分かると敵襲の的になるので心配でした。そこへ、小隊長の中尉が来て「歩哨が伏せることは規定にない」と、ひどく叱られました。そこで衛兵全員を集合させ、小隊長の前で命令されたことを伝えると、全員小隊長に反対し、私の方に賛成したので、早速小隊長の当番兵を呼び「小隊長に食事をやるな」と命令しましたら、小隊長は黙ってすぐすぐと宿へ帰って行きました。その後姿が、今も忘れられません。

小隊長の言うとおりにすると歩哨線が敵にわかり全滅のおそれがあり、私は張り切っておりました。無線兵に命令して中隊本部へ連絡をとり、重機関銃の応援を求め、夜は曳光弾を射っていただき、無事に生き延びることができたことも忘れられません。

小隊長は宮古市におられたと後日聞きましたが、もう故人になり、会いに行くことができません。

また、昭和十八年二月、山西省翼城县七里披村の戦

闘では、こちらの二個小隊が約敵五百人位に包囲され、だんだんと近付いてくるので、もう駄目かと思っていました。その時、後を警戒するよう命令が下り、どうにもならぬと、私一人で引受け後へ下がりましたが、余りにも敵兵が多く近付いて来るので、銃に弾丸を込め、剣を着け、近付いたら射ちながら突く覚悟で、低め、低めの所におりました。

その時、今まで一緒にあった佐々木功一等兵が、鉄帽を貫通され即死でした。場所を移動するよう言っていたのですが、悔しくてなりませんでした。

その時、敵の後方から機関銃音がし「もう駄目だ」と思っておりますと、友軍の久留米第十二師団の方々が応援に来てくれましたので、敵は囲みを解いて散っていき、助かったのです。その後、戦死した佐々木さんの火葬をしましたが、涙が流れて止まりませんでした。

その戦闘の帰路、薄暗くなり、中隊長の乗馬が負傷し、歩けなくなり、如何とも仕難くなりました。敵にさらわれるよりと、弾を射って殺して帰ろうとした

時、馬は再び立上り、悲しそうに泣きながら追いかけてようとする姿は、可哀想でなりませんでした。

私達が北支へ行った時は、軍紀が厳しく、焼かず、犯さず、良民を殺すなどは刑で重く罰せられていました。今、報道されているようなことは、随分誤解が故意か、我々体験者とすれば、実に残念な報道が、さながら事実の如くされておられ、残念でなりません。

私の第三回目の召集は、本土防衛、鹿児島県・天草島であり、家に帰ったのは、十一月の初旬でした。尾道港にて、大隊長が四国の方でしたので、手をふって涙ながら別れたことが、今でも忘れられません。